紹介

第6回中日米複合材料交流会に参加して

末 益 博 志*

第6回中日米複合材料交流会が2004年6月21日から6月25日まで中華人民共和国重慶市の小天城ホテルにて開催されました。実質の会議は21日と22日の2日であり、会議後、重慶市から世界的に話題になっている山峡ダムまでの長江下りのポストカンファレンスツアーが組まれました。今年度の会議では米国のボーイング社からの技術者 Russell Maguire 氏のキーノート講演 “An Industry Perspective of Composite Design and Education Based on 7E7 Experience” があり、中日ではなく中日米と銘打たれて会議が催されましたが、実質日本と中国による学会でした。今回参加者は、日本側から20人、中国側から22人であり、友好的な雰囲気の中で活発な議論が交わされ有意義な学会でした。

空港での出迎えの人とタクシー乗り場の係員との怒鳴りあうような雰囲気での交渉を見ていて気が萎えそうになりましたが、なんとか無事にホテルに着くことができました。受付で会議の登録を済ませると、食事が準備さ

れていました。食事は聞きしに勝る辛さで涙を流しながらビールで口を冷ます状態だったことが思い出されます。

会議は中国複合材料学会会長 Yao Zhang 氏と日本複合材料学会会長石川隆司氏の挨拶で開始され、日本側から17件、中国側から15件の講演がありました。講演内容は、ナノコンポジット、植物繊維由来複合材料、大規模解析など最先端の話題から基礎的な力学や材料特性の研究に関する講演まで幅広くまた全体的に内容の濃い研究が集められており、日中の co-chairman の Ying Yan 先生 (Beijing University of Aeronautics and Astronautics) と倪慶清先生 (京都工芸繊維大学) の開催までの御努力が感じられます。中国サイドの研究レベルの底上げが感じられる会議で日韓同様今後の中国との協力関係を確立していくことの重要性が実感されるものでした。日韓・日中と東アジアでの協力関係を日本のプレゼンスを主張しながら進めて行くことが本学会にとって重要な課題と考えられます。

バンケットは典型的な四川料理で舌鼓を打ちましたが、とんでもなく辛い食材には咳が止まらなくなるなど他では味わえない経験もさせていただきました。このときの日米中の重鎮のスナップを図1に示します。会議

図1 バンケット. Russell Maguire 氏, Yao Zhang 中国複合材料学会会長, 石川隆司 日本複合材料学会会長

図2 会議後の参加者のスナップ写真

* Hiroshi SUEMASU: 上智大学理工学部教授 (102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1)

図3 長江風景 (ダムによって川面が約70メートル上昇している)

後、日中の参加者全員の話し合いで、次回の会議が2006年に敦煌で開催されることと遠くないからとポストカンファレンスツアーがトルファンに決まりました。後で地図を見ると両市の間は東京大阪間以上離れているのに中国スケールでしょうか。会議終了後のほっとした参加者の記念写真を図2に示します。

先にも書きましたがポストカンファレンスツアーは、

図4 三峡ダム

長江下りでした。重慶から山峡ダムまで、長江は狭い峡谷を縫うように流れていて私の抱いていた揚子江のイメージと違っていました。そのときのスナップを図3に、ダイナミックな中国の象徴であるダムの写真を図4に示します。また初めての中国旅行で重慶に行くなんて勇気があると言われながらの出発でしたが、倪先生の心配りと中国側の手厚いもてなしで大変楽しく有意義な旅を満喫することができました。あらためて倪先生と中国側関係者に謝意を表します。謝謝！

紹介

第11回日米複合材料会議報告

濱田 泰以*

2004年9月9日より11日まで米沢市山形大学工学部において、第11回 US-Japan Conference on Composite Materials (日米複合材料会議)が開催されました。その委員長を務めさせていただいた者の義務として、ここに報告させていただきます。日米複合材料会議は歴史も古く1981年に第1回が開催され、その際の委員長は林毅

先生でありました。それから回を重ね、2002年の第10回、スタンフォード大学での昼食の折に委員長をおおせつかってしまいました。歴史ある、日本と米国の複合材料研究を引っ張ってきたと言っても過言ではないこの会議を汚さないように努力するつもりでございました。

本会議は従前のものとは異なり第7回 International Conference on Textile Composite (テキスタイル複合材料国際会議)とのJointで行われました。これも委員長の自己都合といえれば自己都合であります。さらに、本会議の前に同じく筆者が委員長を務める第5回 Joint

* Hiroyuki HAMADA: 京都工芸繊維大学大学院先端ファイブ科学専攻 (606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町)